

令和3年9月

語り部：澤田 剛

私が生まれたのは太平洋戦争が始まって、1年4か月くらい後になります。私の母は私が生まれた頃、父が実はニューギニアに行っていることを知りませんでした。母は、軍事郵便で父に私の写真を送ると、当時の日本の船はどんどん撃沈されていましたが、たまたまうまく届きました。そして、私の写真をみて喜んだと生きて帰った伊予市の戦友が教えてくれました。

ニューギニアにいた私の父の様子を帰ってきた人や戦記などから調べてみると、昭和19年1月10日頃に、おそらく米を五升か六升かもらって、山へ逃げ込みましたが、食料が尽いてしまいました。日本のほとんどの兵隊は栄養失調、それから熱帯性のマラリアで、朽ち果てていっています。ニューギニアには20万の兵隊がいましたが、生きて帰ったのは5%で、95%が死にました。原因は餓死です。弾に当たって死んだ兵隊は少ししかいません。白骨になった死体がニューギニアの至るところで散らばりました。同じことはミャンマーやビルマでもそうでした。松山の兵隊の多くはビルマで死にました。ビルマでもそういう通り道を白骨街道と言いました。こういった状況が、南方の至る所に見られ、日本の兵隊の戦争の死にざまは本当に哀れなものでした。

1944年、昭和19年後半になると、いよいよ日本は追い詰められて、フィリピンのレイテ島で初めて特攻作戦を決断しました。フィリピンから出て行った特攻第1号は愛媛県の西条市出身の少尉で、護衛空母一隻を撃沈する戦果を挙げました。彼は出ていく時に、整備の兵隊に「わしは普通の攻撃でも敵の空母一隻ぐらい撃沈してやれる。その力量のあるわしが、人間爆弾として出ていく。こんなことがあったことを後世の人に語り伝えといて欲しい。」そう言ったそうです。最初の戦果が大きかったので、陸軍の方も負け時とばかり特攻に乗り出し、特攻合戦になりました。実は特攻の戦果は思った程ではありませんでしたが、たくさんの特攻隊がアメリカの海軍艦隊に向かって突撃していきました。

昭和19年の末、20年に入って、サイパン島から長距離爆撃機B29の爆撃が始まります。無差別な焼夷弾による爆撃で、日本の家は木造建築なので、焼夷弾に入っている油脂がものすごい高温で燃え、それで日本の家を焼き払う、という作戦でした。そして、昭和20年3月10日の東京大空襲です。アメリカ軍は、日本のレーダーの弱点をついてきました。日本のレーダーは、相手が奥に連なっているものは見えないので、アメリカの飛行機は何百機もが、ただの列になって東京に来て、夜、焼かれました。この空襲で多くの子どもたちが死にました。学校で、「焼夷弾はたいしたことない。バケツリレーで消せる。逃げるな。」ということを学校の先生が子どもたちに教えていたのも多くの子どもたちが死んだ一つの原因ではないかと言われています。その翌々日ぐらいから後に、全国の都市が次々とやられました。

さて、松山には呉を防衛するために大きな海軍の基地が作られ、昭和19年には掩体壕が

63基も作られました。そこには、紫電改という零戦よりも二倍ぐらいの戦闘能力を持つ世界でも最優秀の戦闘機が配備され、全国から腕利きのパイロットを集めた剣部隊が編成されました。3月19日には、アメリカ軍機が呉空襲のために来ましたが、それを松山上空で迎え撃ちまし、そうとう敵機を撃墜して驚かせています。

そして、昭和20年7月26日です。宇和島、今治に続いて松山も空襲になります。この頃になるとアメリカは日本の空襲に先立って、ビラをまくようになりました。なので、松山でもビラがまかれていたと思います。私の母はこの晩、町内会から連絡を受けます。「今日はやられる。怪しい。逃げる準備しときな。」と。私の母は、まず本町方面で火の手が上がるとすぐに、2歳4か月だった私をおんぶして石手の方へ向かって逃げました。ところがすぐ前にまた焼夷弾がバーンと落ちて火柱になりました。それでびっくり仰天し、湯渡橋を渡って桑原へ逃げます。そしてさらに正円寺の方へ逃げました。この空襲の日の記憶は、私の意識の中でかすかにあります。満月の明るい夜。下が燃えているので空の雲が赤くこう色づいていました。こうして松山市内、一晩であつという間に一面焼け野原となり、JR松山駅から石手の方までが全部見えました。

そうして、8月15日に戦争は終わりました。松山には、堀江和気の海岸にアメリカ軍が上陸して、道後へ進駐します。アメリカ軍、イギリス軍が、住まないといけないので、道後は焼きませんでした。アメリカ兵は物々交換して、日本からお土産のために着物などを持って帰りました。ハーシーのチョコレートと黄色いパイナップル缶詰を持って来てくれ、子どもたちは喜んで食べていました。すごく美味しかった思い出が今も残っています。

一方、国民生活は、戦後もずっと本当の疲弊でした。かつて兵隊さんが一食で食べたお米2合、これが戦後の日本人の一人の一日の配給量です。これだけでは生きていけないので、みんな色んなことをして生きました。百姓がこっそり残した農産物を闇ルートに乗せ、それを買いました。

戦後、松山にもいろいろ兵隊さんが帰ってきて、そして戦地の話などを聞きながら新しい時代を迎えました。僕は、石手を離れて石手川の土手にできた、仮設住宅みたいなところにいました。僕はまだ5歳半でしたが、中国から帰ってきた引揚者から、普通の子どもたちが聞かないような話を聞きました。その中で、新しい時代を、民主主義の新しい時代を、みんな進んで行きます。貧しかったけれど、前途にみんな希望があった、そういう時代でした。